

カール・フローレンツの日本文学史

—— 上代文学史を中心として ——

A History of Japanese Literature by Karl Florenz

—— Focussing on the Pre-Heian Period ——

佐 藤 マサ子*

Geschichte der japanischen Litteratur by Karl Florenz (1865–1939), who was professor of German literature at the University of Tokyo, was published in Leipzig in 1906 (the 39th year of Meiji). It was one of the first books of the Meiji Era to describe the history of Japanese literature at the time when the study of this subject had just begun.

The purpose of this report is to compare it with other works written during the same period (e.g. books by S. Mikami and K. Takatsu, W. G. Aston, and Y. Haga) using a comparison table (table A) and, also, to assess its worth and influence on later Japanese studies.

In his study, Florenz referred to the greatest number of works of literature and authors, etc. compared to his contemporaries and, also, was the first to use the philological and critical methods with respect to Japanese literature. These methods have exerted a great influence on later Japanese studies. In view of this influence, it is surprising that Florenz's achievements have not been acknowledged in these later Japanese works. This report also tries to determine why this should be.

* SATO Masako, お茶の水女子大学大学院博士課程

(1) 序

1906（明治39）年に刊行された⁽¹⁾ フローレンツの「日本文学史」Geschichte der japanischen Litteratur は、現在の日本ではとりあげられる事が少ないが、⁽²⁾ ドイツ語圏日本文学研究に於いて今尚基本的文献とされている。⁽³⁾ 1899（m.32）年にはアストン W.G. Aston によって英語による日本文学史（Short Histories of the Literatures of the World vol.VI, Japanese Literature）が刊行されたが、フローレンツは外国語で書かれた先行書としてこれを高く評価するとともに、1890（m.23）年刊行の三上参次、高津鋤三郎合著、落合直文補助になる「日本文学史」や、芳賀矢一による「国文学史十講」（m.32）等を参考として自らの文学史を執筆した。⁽⁴⁾

この様に近代日本における日本文学史研究開始のこの時期に著されたこれら日本文学史の中で、フローレンツの文学史の内容が如何なる特色をもっているのかを考えてみたい。後述する様に、同書は前掲諸文学史に比して叙述内容が多岐に亘り、且つ詳細な大著である為に、全体を概観するよりは一部分に限定した方が、傾向をより詳細に把握できると考えられる。そこで彼の専門分野であったにも拘わらず、従来論じられる事のなかった上代をとりあげる事によって、上述の様な特質と、更には比較研究史的な意義について考察したい。

(2) 内容と特徴

フローレンツの上代文学史がどのような内容からなり、前掲諸文学史と比べて那邊に特徴があるのかを概観する事を目的としたのが〔表A〕であり、上代の範囲を各々どう規定しているかを比較的に知る事を目的としたのが〔表B〕の時代区分一覧である。⁽⁵⁾

表Aの事項欄は、各文学史が何をとりあげる事によって記述しているのかを知る為に、夫々が記述している具体的事項を拾い出した物である。一定の概念規定に基づいて選択したのではなく、四つの文学史の何れかがとりあげている場合に拾い出されており、○印はその項目に関する記述がある事を示す。各文学史夫々の記述の詳しさの程度には大きな差のある場合が多いが、他に比して余

りに簡単に過ぎる場合△印にしている以外に考慮はしていない。尚各文学史は独自の記述順序に従っていて一致しない場合が多い為に、一応の分類整理を行った。また誤解を招き易いと思われるのは、○△印が当該項目について単に記述のあることのみを意味する点であり、必ずしも当該事項の肯定を意味するものではない事である（例；I. 2.1 の神代文字の項は、○印のある二つの文学史がその存在を主張している事を示すのではなく、斯る議論のある事の紹介の為に記している事を示している）。

表Aの大分類Ⅰは文学の形成基盤に関する記述に充てられている。これは「序文」などに概括的に記されている場合と、個別作品についての記述に含まれている場合とがある。表Aは何れにしてもそうした考察の有無を示したものである。フローレンツを含む当時の共通認識を表現しているのはI. 2.2 輸入文字の項以下である。即ち、日本古代に於いて固有の文化は外来の中国文化と仏教文化に大きく影響され、その中で政治制度のみならず、文学も亦文字を得る事に始まり、記録されて更に発展していったというものである。

大分類Ⅱは具体的作品に関する記述である。ⅠⅡを通して明らかな事は、フローレンツ文学史の記述事項が最も多いという事であり、それは即ち内容の詳細を示すものである。そこで詳しいという事の意味と、その他の同書の特徴について次に考察しておきたい。

I. 1. 1は人類学的・言語学的観点からの記述の有無を示すものである。Ⅱ. 1. 4. 8および1. 4. 16は上代歌謡の形式を西欧詩の形式に基づいて、擬人法と脚韻の有無を論じた項である。この様に西欧の基準を適用して日本及び日本文学を紹介しようとする試みは、当時の状況からして無理ない事と考えられる。この傾向はアストンやフローレンツの文学史にこの他にも多々見られる事であり、それが両書を比較文学的に興味ある内容にしている事も否めない。しかし西欧を基準にした観察が具体的に多くの作品に徹底的に及ばされないで判断が下された場合は、把握が不確かとなり、適切を欠く結論に至る場合がある。アストンは日本詩歌には脚韻がなく、従って無韻詩であるとしている⁽⁶⁾。しかしフローレンツはⅡ. 1. 4. 17の頭韻 Alliteration をとりあげ、日本詩歌が無韻詩で

〔表A〕明治期主要日本文学史における上代に関する記載項目の比較

事 項	著者及び文学史名	三上・高津	Aston	芳 賀	Florenz
		日本文学史	日本文学史	国文学史十講	日本文学史
I.1.1	文学の形成基盤 人類学・言語学的観点 人種・言語の系統		○		○
2.1	文 字 固有文字 神代文字	○			○
2.2	輸入文字 漢 字	○	○	○	○
3.1	文 化 固有文化 民族文化	○	○	○	○
3.2.1	外来文化 中国文化	○	○	○	○
3.2.2	仏教文化	○	○	○	○
4	政治・制度 概論	○	○	○	○
II.1.1.1	文学作品 上代歌謡（主として記紀歌謡） 成立 成立年代	○	○	○	○
1.1.2	歌謡と物語の成立を分離する	△	○	△	○
1.2.1	価値 言語文化的	○	○		○
1.2.2	民族の歴史の証明			○	
1.2.3	固有の民族の性格の反映	○	○	○	○
1.3	主題	○	○	○	○
1.4.1	外的形式（歌体）不定形歌	○		○	○
1.4.2	片 歌			○	○
1.4.3	短 歌	○	○	○	○
1.4.4	長 歌	○	○	○	○
1.4.5	施頭歌			○	○
1.4.6	仏足跡歌				○
1.4.7	（修辞）比 喩	○	○	○	○
1.4.8	擬人法		○		○
1.4.9	呼びかけ・感嘆			○	○
1.4.10	反 覆			○	○
1.4.11	倒置・省略				○
1.4.12	対 句	○	○	○	○
1.4.13	枕 詞	○	○	○	○
1.4.14	序			○	○
1.4.15	掛 詞		○	○	○
1.4.16	脚 韻		○		○
1.4.17	頭 韻			○	○
1.5.1	形成の場 歌垣	○		○	○
1.6	研究史・参考文献			○（参考文献）	
2.1.1	祝詞・寿詞・宣命 成立年代 成立年代	○	○	○	○
2.1.2	成立事情・行為者・伝承者	○	○	○	○
2.2	種類	○	○	○	○
2.3	主題	○	○	○	○

2.4	修辞	○		○	○
2.5	表記・文体・用語	○		○	○
2.6	研究史・参考文献	△(先行学説の引用)		○(参考文献)	
3.1.1	古事記・日本書紀 成立 成立年代	○	○	○	○
3.1.2	成立事情・編纂者・伝承者	○	○	○	○
3.2	素材	○	○	○	○
3.3	資料性		○		○
3.4	表記・文体・用語	○	○	○	○
3.5	修辞	○		○	○
3.6	研究史・参考文献			○(参考文献)	○
4.1	風土記 成立年代・成立事情	○	○		○
4.2	素材	○	○	○	○
4.3	資料性				○
4.4	表記・文体・用語	○		○	○
4.5	修辞	○			○
4.6	研究史・参考文献			○(参考文献)	
5.1	氏 文 成立年代・成立事情				○
5.2	主題				○
5.3	形式				○
5.4	表記・文体・用語				○
6.1.1	万葉集 成立 成立年代	○	○	○	○
6.1.2	成立事情	○		○	○
6.1.3	編纂者	○		○	○
6.2	標題(万葉集の名義)	○			○
6.3	表記・文体・用語	○		○	○
6.4	歌の分類・配列	○	○	○	○
6.5	主題	○	○	○	○
6.6.1	外的形式 歌体	○	○	○	○
6.6.2	修辞	○	○	○	○
6.7	作者概要 総数・階層・時代	○		○	○
6.8.1	代表的歌人 伝記	○	△	○	○
6.8.2	傾向・特質	○	△	○	○
6.9	研究史・参考文献	△(先行学説の引用)	○	○	○
7.1	懷風藻 成立年代・成立事情	○		○	○
7.2	主題				○
7.3	形式				○
7.4	表記・文体・用語				○

〔表B〕日本文学史の時代区分の比較

三上参次・高津鑑三郎 (落合直文補助) 「日本文学史」 東京 1890 (明治23) 年	奈良朝以前	奈良朝	平安朝	鎌倉時代	南北朝及び 室町時代	江戸時代	
	古代 (700年以前)	奈良時代 (8世紀) 詩歌の発展	平安(古典) 時代 (800~1186)	鎌倉時代 (1186~1332) 学問の衰退	南北朝及び 室町時代 (1332~1603) 暗黒時代	江戸時代 (1603~1867) 学問の復興	
芳賀矢一 「国文学史十講」 東京 1899 (明治32) 年	上古文学 太古~平安遷都	上古文学 太古~平安遷都	中古文学 平安遷都~ 鎌倉幕府創立	近古文学 鎌倉幕府~江戸幕府創立		近世文学 江戸幕府~ 明治維新	現代文学 明治の時代
	上古文学		中古文学 鎌倉幕府創立	鎌倉幕府~江戸幕府創立		近世文学 江戸幕府~ 明治維新	現代文学 明治の時代
Karl Adolf Florenz Geschichte der "japanischen Litteratur." (註2) Leipzig 1906 (明治39) 年	上古文学	前期古典文 学	古典性の時代 (平安時代 792~1186)	後期古典時代及び宮廷文 学の衰退 (鎌倉室町時代 1186~1601)	世	近世 文芸復興と 民衆文学の 開花 (徳川時代 1601~1668)	最 近 世 ヨーロッパ の影響の時代 (1868~現代) 明治時代の 文学運動
	上古文学	前期古典文 学	古典性の時代 (平安時代 792~1186)	後期古典時代及び宮廷文 学の衰退 (鎌倉室町時代 1186~1601)	世	近世 文芸復興と 民衆文学の 開花 (徳川時代 1601~1668)	最 近 世 ヨーロッパ の影響の時代 (1868~現代) 明治時代の 文学運動

あるという早急な結論を避けている⁽⁷⁾。両者のこの相違は、フローレンツの方がより多くの作品に入りこみ、それによって西欧的概念の適用をより慎重に行い、日本文学そのものの実際を見失わないようにしようとする態度を持している事によっていると考えられる。頭韻については「国文学史十講」も指摘している⁽⁸⁾。刊行年次からすれば、「国文学史十講」を参考にしてフローレンツが記述したとみるのが穏当かもしれないが、彼の研究経緯からして必ずしもそう断じ得ない点については後述する。

Ⅱ.1.1.2は記紀歌謡の成立に関する項目のうち、歌謡の成立と記紀の歴史物語の成立とを分けて考えるか否かを示している。アストンとフローレンツは極めて明確に両者を分離している⁽⁹⁾。特にフローレンツは多くの例について批判的考察を加え、更に成立過程についても夫々に細かく考察している。両者を分離する事は現在では常識に属する事であるとはいえ、三上・高津文学史や「国文学史十講」はこの点が明確ではない。前者では、記紀が歌の作者であるとしている神々や所謂伝説時代の皇族が、実際に詠んだと考えている。唯、「改竄添削したるも亦甚だ多かるべければ、全く上古の者なりとは断言すること能はざるなり」として、不徹底乍らも疑問が挿入されている⁽¹⁰⁾。同様の事は後者にも言い得るのであるが、⁽¹¹⁾ アストンやフローレンツの明快さ（例えばFは「神々でさえも自らの繊細な感情に詩的表現を与える事を拒んではない。古事記の初めの九首は斯して神々の作という栄誉を得ている…」⁽¹²⁾ とする）とは大いに相違する。この違いは明治25年の久米邦武筆禍事件に象徴される時代の制約を受けている日本人の古代研究と、自由な立場にある外国人との相違に起因する所大である事は忘れてならない点である⁽¹³⁾。とは言え、Ⅱ.1.2.2は「国文学史十講」が記紀歌謡の価値を、民族の歴史の証明として、国家主義的、民族主義的にその成立の古さを主張している事を示す。「…神代から歌のあった事は慥であります。人の世になって、神武天皇などは、色色な軍歌を作つて、士卒を奨励遊ばした様です…」（・引用者）と述べ、宣命に関してもその実用的価値の効用を説き、「今日、教育上、倫理杯を説くに当たって、宣命の文章を十分噛み砕いて、其中の言葉を説くのは、面白からうと思ひます。謀叛する人

などに宣命を御下しになって、かう云ふ謀叛をすることが聞こえて居るが、段々考へて見ろ、斯う云ふことをした者は、栄えた者はない。思ひ止まったが宜からうと云ふ御論がある。然るに、思ひ止まらずして、謀叛をした後に、又宣命を御下しになって（中略）止むを得ず罰すると云ふので、恰も母親が子供を叱るやうに、威厳の中に親愛の情が含まれて居るものが、宣命の中に沢山あります。宣命を研究するに、文学の方面からでなく、此方面から御研究になつても、大層面白からうと思ひます」⁽¹⁴⁾と述べている。この様に古代文学を実用として考える所には、科学的で実証的な研究態度とは相反する姿勢があったと言わざるを得ない。

この様に四つの文学史を比較的に考察した場合、フローレンツの文学史の特徴は、より多くの具体例を批判的・分析的（即ち科学的であるという事である）にとり扱っており、更に内容が詳細であると言う点であろう。また表Aによって明らかな様に各作品に対して記述が統一的であること（均一という意味で科学的）も特徴の一つに加えられてよいであろう。こうした傾向の背景は、彼自身が序文に記している様に、具体的に作品を読む事が基礎となっている点である。⁽¹⁵⁾特にこの上代文学史は、彼が長い期間をかけて系統的に古代文献を網羅的ともいえる程に研究した事を基礎としている。そこで次の彼の足跡に照らし乍ら、文学史著述の過程を辿ってみたい。

(3) 形成過程及び研究史的意義

フローレンツは1888 (m. 21) 年5月に23才で来日後、同年11月からはドイツ東洋文化研究協会（通称OAG）を主たる研究活動の場とし、口頭報告を行うと共に、機関誌に次々と論文を発表していった。⁽¹⁶⁾

日本古代に関する研究は、明治22年6月にOAGで初めて「中国文化流入以前の日本社会の情况」と題する報告を行って、古代の政治や社会制度を考察し、これを基礎に万葉集、日本書紀（神代紀及び推古紀以後）、古事記（上巻の一部）、風土記や旧事本紀（夫々の一部）、及び大祓祝詞の翻訳を行っていく。これらは芳賀や藤代禎輔等の嘗ての彼の学生及び同僚の諸専門家の協力によって

進められていった。⁽¹⁷⁾ 何れの研究も、当時迄の内外の学問的成果を多く採り入れた詳細な注が付されており、従って翻訳というよりは寧ろ独語による注釈書という方が適切な内容となっている。斯様な具体的研究を基礎として彼の上代文学史は執筆されている訳で、彼のこの部分が他の三書よりも詳細かつ分析的なのは当然というべきなのかもしれない。

彼は早くから文学史を著す事を企図していたと考えられる。三上・高津文学史が刊行された二ヶ月後の明治23年12月と翌1月には、OAGで「日本文学の知識について」と「日本文学史について」の講演をしている。⁽¹⁸⁾ 同24年には「現代日本文学史について」⁽¹⁹⁾ という長編の論文が発表されており、新体詩運動を評価する立場から、詩歌の形態が豊富であった日本古代、特に万葉集への言及がなされている。更に同時期には、日本詩歌に脚韻は無いが Alliteration の技法が認められるとする「日本詩の頭韻について」⁽²⁰⁾ も発表されているから、詩歌史を一つの中心とした文学史の構想が、この頃に成立していた事が推測される。彼の上代文学史は表Aによって明らかな様に、古代の韻文つまり歌謡と万葉集歌とに関する項目が特に多い（即ち詳細）。これは彼が古代の韻文は、同時代の散文に比べて文学的に高い価値をもつと考えていた⁽²¹⁾ 事に起因している。彼はここで、西欧の詩とは構造的にかなり異なる日本詩歌の特質を指摘し、形式的にも内容的にも原始的であった歌謡が、次第に形式や内容の洗練と豊かさを獲得していく過程を明らかにしている。更に万葉集を高く評価し、その特質を「感情のすぐれた温かさと自然さ、素直で率直な男性的表現」とし、形式的にも後世の勅撰集に比して豊富であるとするなど、古代和歌を概観している。⁽²²⁾ そしてこの部分が前述「現代日本文学について」の韻文に関する部分と基本的に同じ考え方から成りたっている⁽²³⁾ 点が注目される。表Aで明らかな様に「国文学史十講」とフローレンツ文学史はこの古代詩歌に関して特に多く共通する記述を行っている。ところが日本詩歌の押韻をも含む韻文史に関する認識が、基本的には既にこの時点でフローレンツによってなされていたという事は、先述の頭韻をも含む「国文学史十講」の記述は、フローレンツが彼の文学史著述以前、既に明治23～4年に発表していた見解に依拠していたのであ

ったと考えられる。「国文学史十講」はフローレンツ文学史に先行して刊行されている為と、従来フローレンツの日本文学研究の経緯が知られていなかった為に、古代韻文に関するこのような新しい見解は芳賀の創見であった様に考えられがちであった。しかし西欧的概念の導入による日本詩歌の分析的研究は、フローレンツによってまず行われたのであったと考えるべきであろう。彼の行った万葉集研究には藤代禎輔と共に芳賀も協力していた。²⁴⁾ フローレンツと芳賀との間には、芳賀が具体的文献や国文学者達の学説、用例等に関する知識をフローレンツに与え、他方フローレンツはこれを分析的に意味付けていくという形での協力関係が恐らくは存在したものと推測される。それによってフローレンツもまた来日間もなくして上述のような見解を形成し得たのであったろう。

フローレンツは来日前、リップツィヒ大学とベルリン大学で、主に文献学 Philologie と、幾つかの東洋語を学んでいた。サンスクリットの一部の頌歌の注釈によって、リップツィヒ大学から学位 Doktor を得ると共に、同論文は優れた研究として同大学の学部賞を受賞している。つまり古代文献学は彼の専門領域なのであり、その方法を適用して彼の日本研究は行われたのである。それによって彼は、Philologie の方法を極めて具体的な形で日本の国文学研究に伝えたものと考えられる。

彼は明治22年から大正3年迄の間、草創期の帝大独文科のお雇い外国人教師²⁵⁾であった。この間主として官学は独逸学重視の傾向を強めて行ったがこれは改めて指摘する迄もないであろう。国文学研究に独逸文献学を齎したとされている芳賀の研究は、従来考えられているように明治33年からの彼のドイツ留学によったというよりは、その更に前に、既にフローレンツとの万葉集の勉強の中で育まれていたとみるべきであろう。

藤村作は「国文学史十講」について、「研究の方法が、一方では科学的方法で、形態について新しい発見をなさろうとしてをられ、一方には文学精神の上で、各時代、各形態の上の繋がりや、その史的展開を探ろうとしてみられ、なほ修辞現象等についても、我が文学の特殊性を見出さうとしてみられたことが

知られるのである。かうして文学史が先生の手によって、真の文学史らしくな
って来たのである」²⁶⁾と回顧している。しかしこれらの点は、フローレンツの
文学史により徹底した形を認める事ができるのである。

(4) 結

久松潜一著の「万葉集の新研究」は大正11年からの東京帝大での講義覚書を
もとにしたというが、これは近代的万葉集研究書の嚆矢であり、長く一つの規
範となってきた。万葉集を形成と思想内容の両側面から捉え、更にその為の基
本的手続きとしての書誌や研究史を組織的に考察し、更にそこから個別作家研
究に及んでいく整然とした内容となっている。こうした研究形態はフローレン
ツ文学史の上代韻文に関する部分²⁷⁾が採っているものである。当該部分でフ
ローレンツは祝詞が万葉集に及ぼした影響の大きい事を指摘し、その代表的例
として柿本人麿の場合をとりあげ、次の様に記している。「…人麿の長歌と祝
詞との緊密な同質性を早急に認める為には、両者を単に表面的に比較するだけ
でいい。両者には同一の情緒や、同一の莊嚴で祝祭的で頌歌的な表現のしかた
や、世界の創造や、神々の会議や、天孫降臨を以て序とする同一の傾向が認め
られる。人麿は自らの詩的趣味を無意識の裏に祝詞の中から形成した。そして
てその事は他の歌人達にとっての規範ともなった」²⁸⁾（・引用者）。「万葉集の
新研究」でも同様の事が考慮されており、「…少年時代から耳に語りふるされ
た高天原の神々の会議、莊嚴なる神の物語、それらは人麻呂の胸にひたと沁み
こんで、行幸の供奉につけ、皇子への挽歌をうたふにつけて思ひ出されるので
ある」「人麻呂の長歌が如何なることをうたふ場合にも先づ神の有様の描写に
始まるのは、単に不必要な技巧と見るべきではない。それは人麻呂の心にとっ
ては、最も力強く頭に沁みこんだ觀念であって、この既成觀念のもとに色づけ
られて、人麻呂の詩歌の世界が現れるのである。その莊嚴な神の殿堂は、人麻
呂の思想に深く沁みこんだ所であり、莊重な人麻呂の詠出法も、この人麻呂の
心の表出に外ならない。これを単に祝詞の思想形式を学んだものであると言ひ
きってしまうことは憚りたいやうに思ふ」²⁹⁾と記されている。双方共に祝詞の

人麿への影響は、学ぶ事よりも深い繋がりで成立していた事を分析的に認めている点や表現や用語に共通性が認められる。久松博士はフローレンツを深く尊敬しており、在外研究の為にヨーロッパ滞在中の昭和10年には、ハンブルクにフローレンツを訪ねている。³⁰⁾ フローレンツの文学史が近代国文学研究の一つの指標であった可能性は、斯る点からも推測され得るのではないだろうか。

この様に、フローレンツの文学史が国文学研究史上、決して表に現れる事はなかったものの、地下水脈的意味を持ち続け乍ら、その後次第に忘れられて現在に至っている理由を最後に考えておきたいが、それは偏に同書が刊行された頃の時代性の問題に帰するかもしれない。というのは同書は古代史料に対して徹底的に科学的分析的態度を貫いている³¹⁾ と言い得るからである。従って昭和11年に土方定一、篠田太郎共訳によって同書の日本語訳³²⁾ が刊行された時は当時の常として、天皇はじめ皇族に関わる部分には敬語が付される等の配慮が施され、その為に原文とは趣を異にする所となった。

その後自由な古代研究が行われる様になった戦後の時代は、言う迄も無く日独関係が大転換し、戦前戦中の独逸語熱冷却の時期にあたる。斯る諸関係変遷の中で、次第に忘れられてしまった事と思われる。しかし唯一明らかな事は、我々の戦後の新しい古代研究といわれるものは、フローレンツに於いては既に明治22～3年に始められていたという事なのである。

(注)

- (1) 同書は1903～6年の間に五分冊本及び二分冊本として逐次刊行された。

一冊本としての刊行が1906年9月12年であり（内容変更はない）東洋文学叢書の第十巻にあたる。発行は Leipzig, C.F.Amelangs Verlag であり、ここでは1906年版に拠った。尚第二次大戦後西独で Amelangs. 版から権限を委ねられた K.F.Koeler Verlag (Stuttgart) から再刊された。

- (2) フローレンツに関しては富士川英郎、小堀桂一郎、千葉宣一、上村直己の諸氏によって研究されている。詳細は拙稿「カール・フローレンツ年譜考証」（『日本古代の政治と文化』（吉川弘文館）所収）を参照されたい。

- (3) Hamitzsch, Horst: Die Japanologie in Deutschland, in: MOAG 28, Supplementband. Tokyo 1966. B. レヴィン「日本文学の独訳について」(『国文学研究資料館紀要』8) 他。
- (4) フローレンツ「日本文学史」序文Ⅳ、Ⅴ頁。尚、三上・高津文学史については具体性を欠くものであると批判的である。
- (5) アストン文学史は London, W. Heinemann 1899年版、三上・高津文学史は東京金港堂明治23年版、芳賀「国文学史十講」は『芳賀矢一選集 第二巻 国文学史編』国学院大学昭和58年版に拠った。
- (6) 前掲同書28頁。同書日本語訳は「W. G. アストン日本文学史」(川村ハツエ訳 東京七月堂昭和60年)が新しい。日本語訳30頁。
- (7) 前掲同書28～9頁によれば Alliteration とは例えば「よき人のよしとよく見てよしと言ひし芳野よく見よよき人よく見」(万葉集巻一27番 本文は日本古典文学大系本によった) などである。
- (8) 前掲同書202～3頁。
- (9) 前掲同書アストン7頁(訳; 13頁)、フローレンツ10～11頁。フローレンツは「それらの歌謡は物語形式の本文の中で、その歌謡が真に成立した所に記されているものもあるが、そうではない所に記されている事も間々ある」
「伝統的に言われている如くこれらの歌謡の大部分が、これら史書の書かれる千年以上も前に発生したという程に遙かに古いとする事はできない。これらの大半は西暦5～7世紀に初めて発生したのであり、原形もしくは手を加えられた形態に於いてより古いものもここに挿入されている。構築されている配列順序は、歌謡発生順序の厳密な基準となっていない」(日本語訳は発表者)など詳細な考察を行っている。
- (10) 前掲同書74～6頁。
- (11) 芳賀前掲同書 199頁。
- (12) フローレンツ前掲同書10頁。
- (13) 大正3年帰国に際しての送別会の席上でフローレンツが述べた謝辞には、彼の研究成果がその多くを自由なる思想 Liberalität に負っている事、特

に文部当局の理解による事が述べられている (Deutsche Japan-Post 13. Jg.Nr. 15 の 513頁。詳細は前掲拙稿参照)。これは殆ど特惠的な事であったと考えられる。

(14) 前掲同書 199頁、220頁。

(15) 前掲同書 序文Ⅳ頁。

(16) この間の事、及び伝記的事柄は前掲拙稿に述べたのでここでは詳細を省略する。

(17) このうち万葉集注釈は遂に刊行されるに至らなかったが、その間の事情については拙稿「カール・フローレンツの万葉集研究」(お茶の水女子大学人間文化研究科『人間文化研究年報』第10号)に述べたのでここではふれない。

(18) MOAG Bd.V 231、282 頁に記録がある。

(19) 原題は Zur japanischen Literatur der Gegenwart. (MOAG Bd.V)。

(20) 原題は Alliteration in der japanischen Poesie (MOAG Bd.V)。

(21) 前掲日本文学史75頁。

(22) 同前10～36頁、75～6頁、86～94頁。引用は87頁。

(23) 注19所引論文 317～8頁、323～5頁。

(24) Pierson Jr., J.L. : The Manyōshū Book V. Preface. Leiden 1938.

(25) 彼の場合当初は講師であり後に教師 (Professor を称し得る) となった (前掲注2拙稿参照)。

(26) 「芳賀博士と明治大正に於ける国文学研究」(『国語と国文学』昭和12年4月) ここでは『明治文学全集44』所載 (410頁) によった。

(27) 前掲日本文学史75～124頁。

(28) 同上93頁。

(29) 「万葉集の新研究」は『万葉集の研究(一)』(昭和43年至文堂刊)によった。引用は同書71頁。

(30) 「フローレンツ博士と日本古典文学」(『西欧に於ける日本文学』昭和12年)。

(31) その典型例は前掲日本文学史10～11頁であるがここでは引用を省略するの

で発表資料（３）－（Ｈ）を参照されたい。

- (32) 同訳書は国文学への「よき入門書」（訳出当時）とする見解に基づき訳出された。同書には久松潜一、斎藤清衛、藤田徳太郎が、訳出に対して示した好意に感謝する旨が記されている。（「例言」）。同書は昭和11年6月楽浪書院刊である。

MOAG; Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur und
Völkerkunde Ostasiens.